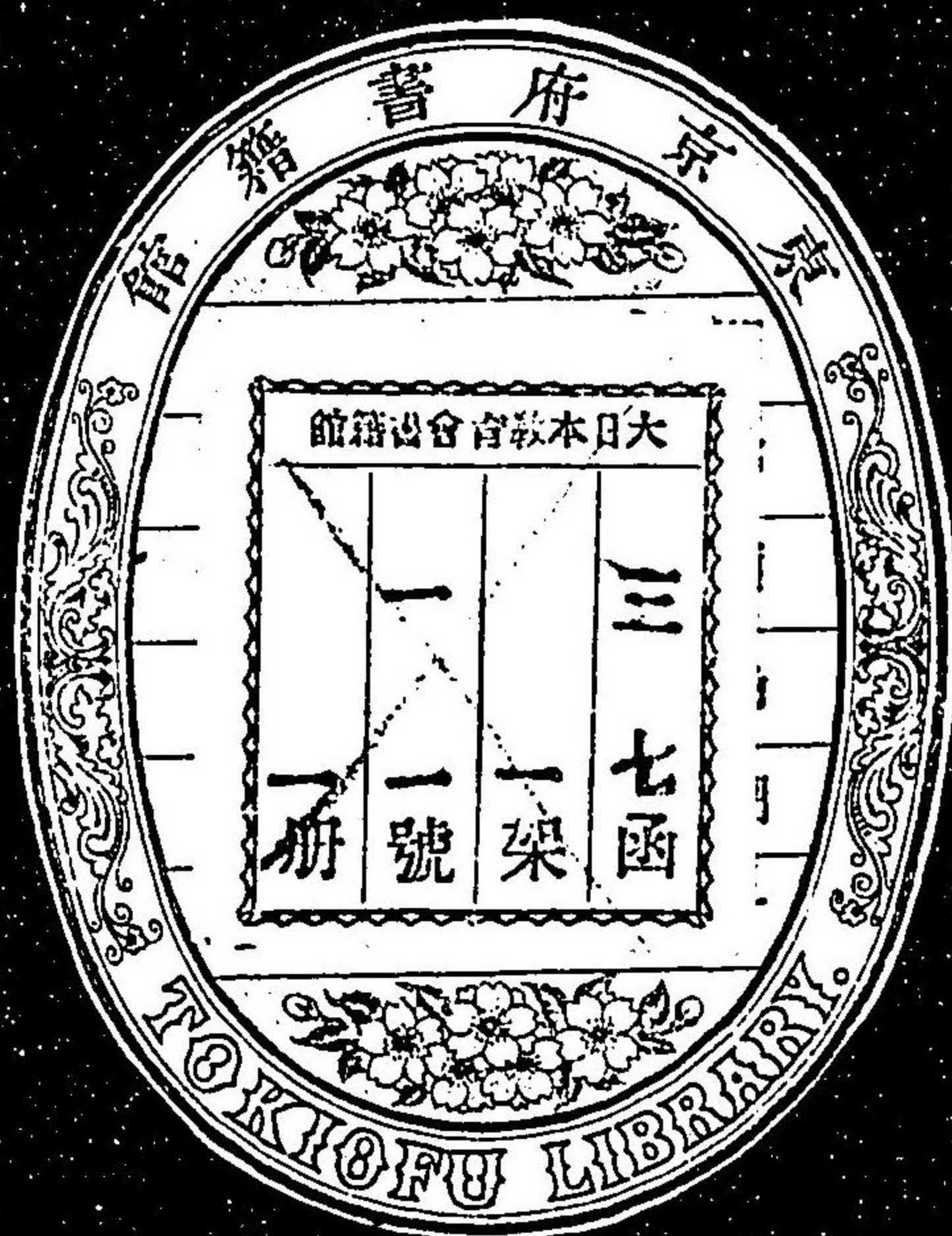


因循一掃

增山守正編

全



689

本
壹

027280-000-4

特42-689

因循一掃

增山 守正/著

M10

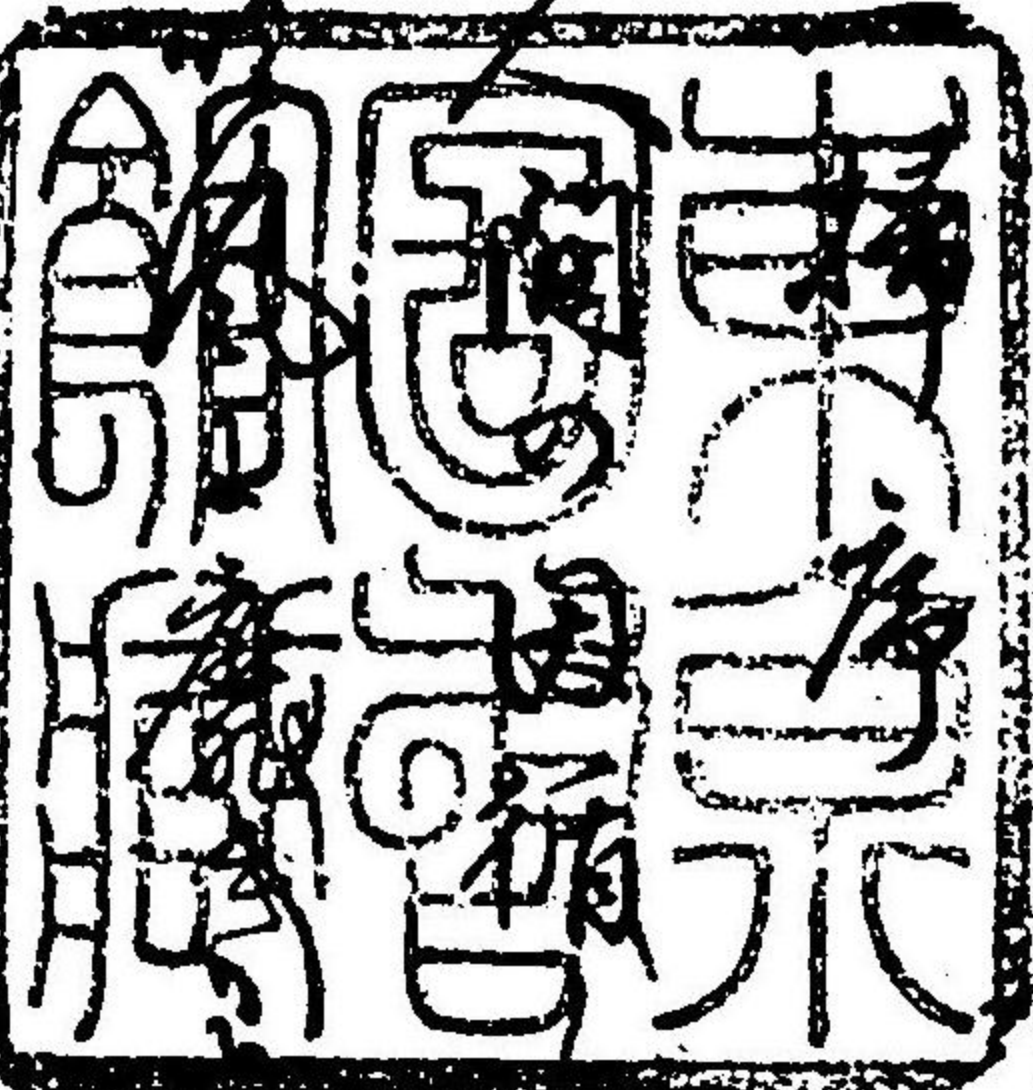
ADJ-0008



特42

689

因循
支那
柳の



明治二十九年四月五日

姑息者同も者る能く喻
 或ハ河水結下ハ流るる如くハ
 温和の様ハ見ゆを在
 運らるる如くハ
 其を免せざるハ返
 異説立テ卓尔獨見も者ハ怪ハ浪を碎ク岩
 又ハツヨク寒風ハ立つ松栢の雪中ハ益者
 如くハ是等ハ交するハ似ル共其直き率其の

必く道よ破竹の勇いん 僕を古く及ぶも 以て交
明の沖代よ遙く大御意の深きふ 汝一唯徒
光陰を消よる多極の志せあき 固く白髪霜鬢
を振りまよぬら 天地の窮理の書史よ昭を曝し
躬覚悟せし故よ世よ使らまぬ 未の年よ意留し
新著しを既よ 官許を得しぬよ 公様をふし
世よ尚しぬ 今又は書著しを 終因循を去らぬ
し 名附し因循一掃し 公よ看方彼の業よ一獲

能趣意と見たり 誤り故中 窮理補せん事
を千葉乞ふと云

文明開化聖恩深 實学研窮窮理欲
掃り去り因循和麻弊 歎末公法一新心

明治八年一月

丹波信部 増山守正撰

因循一掃

目錄

龍

麒麟

鳳凰

龜

灸

鶴

鎮帶

肉食

結髮

附 勸學以呂波歌

丹波綾部 增山守正著

東橋本種
書經
龍書

龍能く幽ふ能く明ふ能く大ふ能く小ふ能く天
よ登り能く水よ潛み名ハタツと唱えはく四足五采よ殊
の外神靈ふる世の中よ鱗蟲種類多き數三百六十六よ
了龍夫せ之う長と一ハ十一の鱗は又其龍よ三様
此區別の有る鱗のみ纏ひしを蛟と云ひ翼あるは
ハ應と云ひ角の有るを虬龍と云ふと説せし鬼よ角よ
神變奇特の徳備へ出沒自在雲を呼び天よも登る様よ説
く是を實學の真成に窮理合密を知らぬ故取り認めもな



る偉業 (世田)

古來龍說悉
虛然
即是有名無
實傳
事理當知鱗
甲體
排雲何得到
天邊

き孟浪の説を立ると思はる。夫を乾坤裏両間の森羅萬
像有機無機上ハ日月星辰よ下る昆蟲微物よを総一
定範圍何里竟ふ六十餘元素よ歸して天象地球皆其理其
體有らぬふ抑地球發生の動植二物の有機體金石土質
の無機體も炭酸水窒諸原素の舎密親和の集合を以て製
造せざるな。然らバ俗よ云ふ傳ふ正法不測ふき理あり
然るふ支那の國ふる龍の無き理を考一を妄に虚を吹え
空を説き廣大無窮よ説を附け天子の徳を龍よ比し龍顔
龍體逆鱗と人間外の名を付る愚痴の至りといはつる
抑天子の其徳を日よ比し月よ象るハ現在光り輝き一實
地の譬喩と思はる。然るよ龍よ以ふ物ハ世よ無き物よ

察さるる假令有るも水陸の両間兼る動物の類も歸する
 我萬物の靈も生ぜし人間の未だ其上に上極の天子に比
 較する事ハ愚痴と大罪道せんや假令ハ爰も人にして人
 を指さず獸面と評せハ必ま怒る處一是れ何故ぞ人間を
 獸に比したる故あらん假令龍徳神變の真も世界も有る
 せよ人間外の者なるも萬物靈の其上に無上至尊の聖
 體を人間外に象るも無禮至極と云ひつゝ處一抑天に登る
 說雲を起すもの雨を呼ぶなを品玉輕業師或ハ飛鳥輕氣
 球眺る様も幽明や大小變化出沒のある處き道理更な
 一羽翼備へし鳥も人飛揚の時間限りあり況や長體鱗
 甲も應龍假令一翼の有るも致せ何も眼當て何を望て

蒼々の涯際もなき空中へ何を飛揚のある處きや上をハ
 下る道理あり然るも龍の天上ハ人喧しく唱せし遂に地
 降を見し人の無きめて虚をハ證を盡し死や天地の大範
 ハ羽翼ハ羽翼鱗甲ハ又鱗甲も其種類資判然と分せしを
 鱗甲體の其上に翼を備る應龍ハ羽翼の鳥も屬するも鱗
 甲類も屬するも所謂俗に繪空事画きし牙も角のある鬼
 の姿を見る如く龍も牙と角とらる是も虚誕に繪空事
 鬼も猶一層の鱗翼爪角錯雜ハ虚無妄誕の證據なる萬
 一有らハ禽獸と魚蟲の間屬族の區別も疑惑起る處一況
 や世もハ絶る無き龍の名前を仰山も説き出さのみ和
 漢共帝王もさへ比較し利口らしく説き觸らる其根

本ハ乾坤の實學窮理知らざりて古來欺罔の因循故説は徒
 故ぞう一夫を萬物の形を中み人を長とて獸
 ハ熊虎獅象の大は魚鱗鯨鯢鮫鱧の大は鳥鷹鷲
 雕鷲鷄の大は蟲蟻蛇蚺龜鼈の大は風土は因
 古來より生せぬ國ハ有らざる天地開闢其以來生せし物
 ハ萬古より有るを理なき眼に見えぬ微公物も是非
 なる大なる者の平生の眼は掛らざる道理も上代仰
 ぐ日月も今日仰く天象も五行も今も變りなく人物禽獸
 魚蟲一草一木有機無機尊尾胎孕の夫々も皆定則の
 る物を能く幽明や大小も能く登天や水潛の變化出沒を
 る様も奇妙な事の有るべきや僕々愚接了斷せんよ龍を

固く其外麟鳳の今日本種類残らぬ其物ハ総て
 断りて虚説とを中し就ても麟鳳ハ鹿と鶴との變體と論
 定する事足らん龍も或ハ大蟒の誤認或ハ變體とせば
 説ありしを愈うらま何せよ致せ別段は龍と麟鳳一種類
 有るをき物とを愈うらまを聞かや古語に有る通り夫を悉
 く書籍をバ信ぜハ書籍なきよも如く有るを知らざ
 るや一草上り論と支那の所謂黃帝の屈軼草堯帝
 の世に生ひ出で曆草ハ是皆眞の虚説とを有らば今よ
 る傳へる人佛家ハ八大龍王は是亦虚無寂滅や空
 理方便説く宗旨決して齒牙の掛くべからざる當時ハ則文
 明開化實地窮理の御代ぞう唯因循も古記録や空理の

説セツよ信シン従ジュウ一イツ世セよ媚メイび人ニヒトよ阿アりリ了リョウ唯ワイ有ユウ難ナン一イツ尤モトモト追ツイ従ジュウのみ
 於オ著シユ述シツ家カハ真シン活カツ眼ガンと云イひ難ナン一イツ古コ代ダイの空クウ理リ因イン循ジュンを一イツ掃ソウ致シ
 一イツ諛ヘツハハ新シン發ハツ明メイの説セツ吐タイ了リョウ四シ方フ大ダイ家カの先セン生セイよ是ゼ正セイを乞キつ
 正セイ真ジンの道ミチ中チュウ乎カ外ガイ乎カ世セ界カイ萬マン國クワク通ツウ論ロンよ歸キ一イツ後ノチ止ヤメむ
 有ユウき道ダウ理リあり総ソウ了リョウ支シ那ナ書ショハ傳デン來ライの虚キョウ誕タン邪ジャ妄ヤウの説セツ多タ一イツ禹ウ
 帝テイの江エをバ濟ケツす時トキ黄ワウ龍リウ現ゲン一イツ舟フネを負ヲふ舟フネ中チュウの人ヒト懼オソせし
 禹ウ帝テイハ命メイを天テンよ受ウケけ力リキを竭ケツ一イツ萬マン民ミンを勞ロウふあらち何ナニと
 了リョウ龍リウをバ憂ウレひ怒オウるべき龍リウを見ミる事コト蟻アリ蚋ヱを視シるガ如ゴト一イツ
 有アりけせハ須シユ臾ユよ其ソノ龍リウ首カビをバ俛ウツけ尾ヲをバ低ヒせ述ユくと是コト
 禹ウ帝テイを譽ホメんとす龍リウよ託タカせ一イツ寓クワダシ言ゲンの虚キョウ誕タンの説セツと思オモハす
 天テン地チの道ダウ理リ察サツせむと總ソウ了リョウ支シ那ナ書ショを信シントふバ禹ウ帝テイの御ミ代ダイ

一イツ天テン金キンを雨アメふる事コト三サン日ニチと有ユる記キ録ロクふど如イフ何ニと霜シユウ露ロ
 雨アメ雪ユキや霰セン電デン翼エキ是コトらハ水スイ氣キの變ヘン體タイガ風フウハ空クウ氣キの動ドウ搖ヨウなり
 雷ライ電デンハ酸サン素ソと水スイ素ソ平ヘイ均キンを得ユんと欲カクし、空クウ氣キをハ越エ列レ氣キ
 迸ヘン發ハツ破ハ透トウさるゝゆゑ空クウ氣キの填タムんとす故ユ一イツ声コエはる光ヒカリあり
 其タ他タ稀ヒよる酸サン素ソ瓦カス斯ス燃モ之ノ固コよまじり燒ヤキ糟サウゆ彼カの俗ソクよ鍊カネ糞クワと
 いふ如イフき然シカ石イシとあり落オチる事コトはり春ハル秋アキの書ショよ石イシ隕インと慶ケイ々
 一イツ出デたる其ソノ外ガイよ三サン日ニチ間カンの金キンの雨アメふると云イフ理リハ無ムき義ギ也
 此コノ類ルイ支シ那ナよ數スウ多タ一イツ閱エン者シャハ別ベツよ活カツ眼ガンを開ヒライて欺キ罔ワウ受ウケくるを
 其ソノ證シユ據コよ天子テンシたる徳トクの有ユウ無ムよ從ジュウふる陰イン陽ヤウ和ワ不フ和ワ豊ホウ凶キウ
 の造ゾウ化カ隨ズイ意イよあり様サマよ思オモふ可カ笑カシ一イツ然シカはらハ堯ガウよ洪コウ水スイ
 患ワンふを理リふなき道ダウ理リ湯トウの世セよ大ダイ旱カン七シチ年ネン有ユる理リふ一イツ或ハ

天よ星飛をバ其分野も大將よ不吉が有るは日食や彗
星出せハ其罪を天子宰相兵乱よ歸するらんごとく年月を
限りて出る日月の蝕や彗星仰ぎ見ると恐おそきなまも曆教
の道を曉らぬ故ぞか五大洲裏や六大洲裏に仰ぐ日
月の蝕や彗字其外邂逅よ出る星見るとハ千分一や萬分の
地球の一よ足りもせぬ微々小國の君徳の有無よ歸するも
愚ふま甚しきハ嚴子陵東漢光武の腹上へ足加せバ太史
出た客星御坐を犯す事甚急よなるなると三尺童子も知
る虚語を載するも事理を知らぬあり廣大無邊の天象を
微々々々の嚴子陵足一本で客星を自由隨意よ動せし様
よ歴々明々と歴史よ載せし馬鹿はらり夫れよ限らざる西

漢の宣帝の世よ丙吉が闘死を問はる牛喘を問はる醜然陰
陽や造化の變を宰相の徳よ自由よ振り舞ハを様よ思ふ
も愚痴あらん所謂天よ測らぬ風雲起り人の身よ又暫く
の禍福あらん抑地震雷火も天より造せる災ハ猶避く處
けを自らよ作り出せし禍ハ道よ奪りて鬼よ角よ非理
ふ心を晦さむ此文明の化よ浴し廣大無窮の鴻恩を蒙る
からハ實學を研窮なりて智を研き古來因循雷同の龍鱗
鳳を排斥の新發明の説を述る聊よ其説の取る處なき
あつて本懐よ僕よ愚眼の届くだけ僻論述るる活眼の君
子よ是正乞ふよ

麒麟

麒麟の説

四時

其言何怪

庶幾

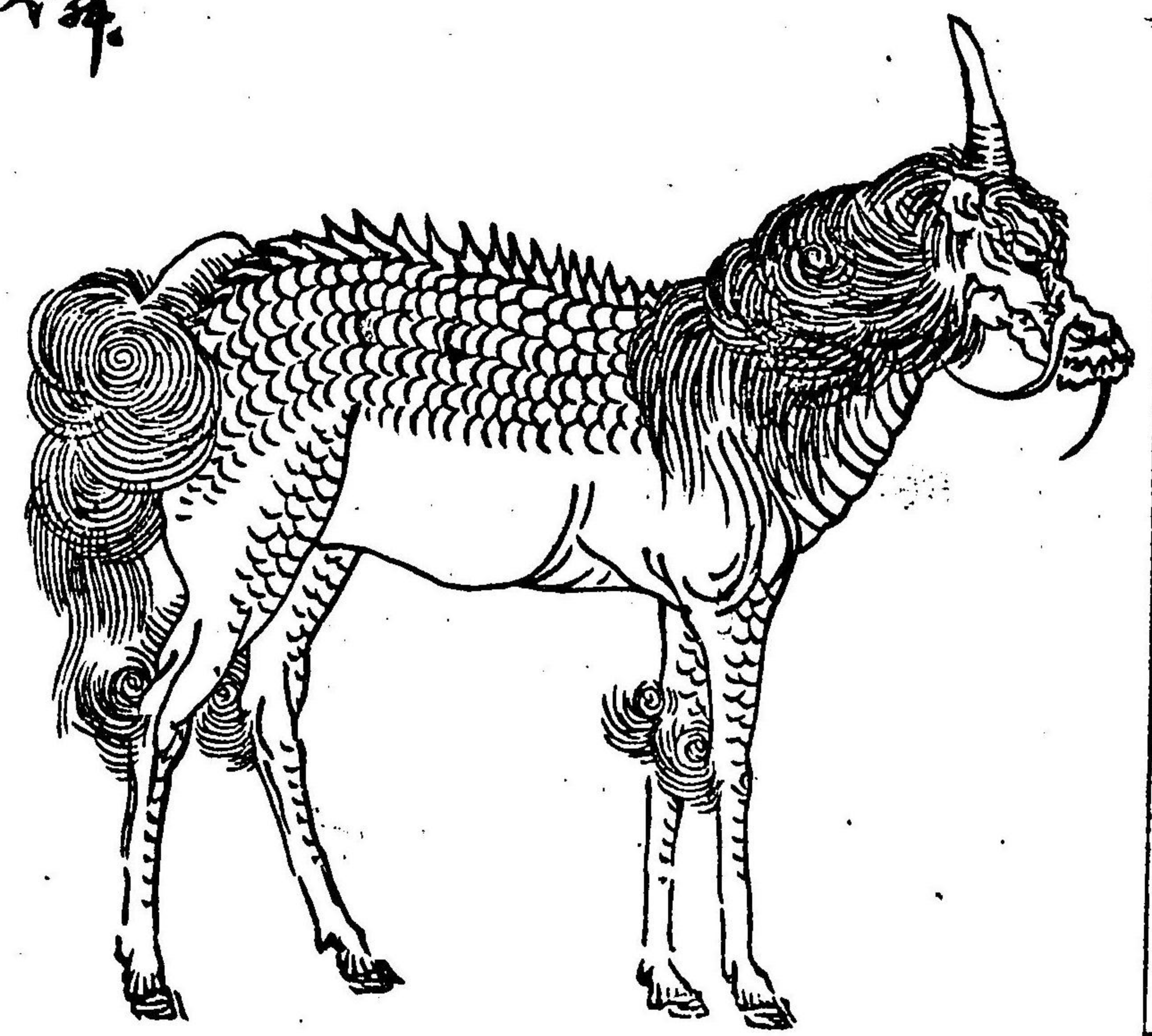
頃後乾坤始

厚物

忽然何化

生一奇

石像



麒麟ハ古書ニ仁獸ト云テ麋ノ身牛ノ尾角一ツ牡を麒ト名付
 け北ハ麟又一説ニ麟ノ身ハ麋ノ身牛ノ尾馬ノ足色黄蹄ハ
 圓ク一ツノ角其端ニ肉有リ其鳴ク音ハ鍾呂ノ中
 リ其行く時ハ規矩ノ中ニ其遊ぶ時侶行せむ良地擇み後
 至仁有リ生蟲履まを生草を踐まを群り居りむせむ王者ノ
 至仁有リ時々則出遊ぶに至り又一説ニ并州ノ異ノ麟
 ハ有るをを瑞麟ト云ハ無ト説き字義總略ト云書
 ふを麟ハ乃大鹿ト云至り麒麟ノ骨髓を説出ハ至言
 何是也麟體ノ本源を前条説ト云如き王ノ至仁を待
 出る生蟲履まを生草を踐まを窮屈を辛抱仕遂
 く物有る又一中条ト云如く瑞麟ト云と差別有るを

等ハナ一魯國ヲ得ル其麟ハ偶然得タル變鹿乎并州邊
 不常住の麟有るを珍奇と云ふ難く一魯國よき
 得たるが瑞の麟より其種ハ則別は何國よ育ち了狩り得ら
 せしや忽然氣化して致さるる俄然天より降るる卒然地
 より湧るる孔子歎ト春秋を作らざる不審至極なり
 僕も愚按了論せん何れ怪む事である鹿を見ざるは事
 足らん唯孔聖の獲麟は筆を閣さる歎息ハ時勢の流季王
 道の行ハせざる萬感の胸は群り満り時時々々變鹿
 の溫和の兆獸非命より討殺され不仁ある時々々感激寓
 意より春秋作り玉ふらん聖人待了邂逅は氣化して出
 麟をふり唯偶然は快鹿の兆獸と見ハ事足らん抑麟の正

體ハ字義総略より如く大鹿と見了通例の鹿は違ふ
 變體ハ鹿と見なさば世の中は疑惑ハ更は無くはるる
 州邊に居る説が實なら真に四靈ある貴徳もなかり珍奇
 なる獸より更におもふ夫れ何れや瑞麟の附會をさる
 了蛇足添へ高知せし獸類を王者の至仁待了出た天
 降地湧の如く説く是因循の愚論あり若し又山に隱せ居
 了王者至仁を待了せを熊虎猿兔と諸共は獵夫よ得らる
 了けせ共孔子春秋閣筆の起源とあり其外は黃帝の世
 了麒麟苑園に遊ぶるあり了堯の世は麒麟郊藪に遊ぶる
 了又漢の武帝元狩元年一角獸を獲了あり其他ハ多
 了見當らざ山に隱せ了君王の至仁を待了出たなりハ麟

や禹王や湯王や文武の世より出る理若く又山より住む
なるバ獵人共の古来より數澤山より得るべき理其義も聞
ぬ其譯ハ常住するべき證確ど山より住するを黄帝と堯の外
ぬ數多き聖王の世より出る事のなきハ瑞麟祥靈と持離
子登る物でもく偶爾變體大康と見あつて以て善る處
左より靈獸瑞麟の王者至仁の時待り山より隱る物
せむ何樂しむ生蟲も履まぬ生草踐まむ時を待居
る辛抱ハ人子申さバ俗より云ふ阿房律義乎且又馬鹿正直
と云つ登り僕も愚按て論せんは瑞麟九麟差別あり時
取りの偶然より出来損へたる一大康治亂聖愚の差別あり
其證據よりハ舜禹湯文武聖王歴々の世よりハ出むる聖なる

き漢の武帝の世より獲るる齟齬と出やうは非や彼の
總略より通し皆康中の一種族角より肉らる變形は温和
の性を頂き人傷むぬ仁獸と見あさバ可あり呉々ハ偶
然康の一と變化しる姿と見あさる一乾坤間の大範圍
尊尾胎孕の夫々より萬古動るの準則の有るべき者を氣隨
意より水より泡の立つ如く何を種子の氣化せんや況や
聖主何より舎密有る隨意より氣化させる奇功奇特の有る
や決して麟を靈瑞の有る者よりとむるを左ハ去り
あつら聖王の世なれば出るといふ事ハ夫せよ一理ハ有
るの登り暴君あつた禽獸ハ愚う人々ハ傷むん然る聖
帝仁君ハ仁愛物より及ぶ故妄より物を傷ぬ故より禽獸逃く

馴せ都城近くよ来り故麟よ限らば猿虎鹿皆諸共よせよ
 出ん其證據よハ文王のせよ名も高き靈面や靈沼邊よ釋
 遊ぶ鴻雁鹿白鳥も手よ馴せ遊ぶ道理あり麟の瑞九
 抱はらま山よ隱否も問はむ麒麟ハ偶然大鹿の變形
 體と定めまバ別よ怪しむ事ハ古よりハ靈物と説き
 仆ハ珍とせむ舊習因循一掃一新説述を博學の君子
 教諭乞ふと云ふ

鳳凰

鳳凰ハ古説よ雄を鳳といふ雌を凰といふ好む梧桐の實
 を食ふと云り説文よ神鳥として蛇の頭魚の尾鷲の頸駕の
 頸龍の文龜の背燕の頸鷄の喙五色備り舉り東方君子の



形姿偶然有る
 乳母 高植一様場
 鳳凰 何怪 生於新羽
 毛新にかま新光

万俣亨
 世明

國よ出四海の外よ翔翔一崑崙を過ぎ砥柱を飲み羽を弱
 水よ濯む暮よ風穴よ宿まよ何陸佃ク云よ羽蟲三百六
 十よ一鳳之の長よ何注疎の説よ云へよふを瑞應鳥
 ハ其高さ六尺許り有るよある山海經よ云へよハ丹穴
 山よ鳥何其状鶴の如くあり五彩の文を備るを名付
 了鳳よ以ふと有り左傳服虔注よいふ貌恭體仁はる時
 則鳳凰來儀ま諸説紛々異ま何せも確乎せぬ議論
 先つ説文を辨せんよ形容比較ハ其儘よ於る論せま其説
 の中よ東方君子の國と何其目的ハ恐らくハ我日本の
 國あらん遂よ我朝古来より鳳凰來儀を聞されど
 天武天皇年中よ白鳳よ以ふ年號ハ鳳の來儀の有り一は

支那よ贈矣の瑞鳥の名よ寄せりせ故あるの然るよ鳳
 の羽毛よ五色彩備ふと傳ふまよ白鳳の名は出典ハ僕
 不學よ解難よ必ま由來ま所有よべき事と思ふま
 夫ハ何置き崑崙の山ハ則支那の國崑崙過よいよらハ
 直よ支那の國指し東方君子よ事乎分明まぬ事
 なるら如何ま鳳の出るの支那よ限せぬ事ま
 見聞よ狭き故支那の國よ其外他國よ鳳の有る事を
 聞ま故よ瑞鳥や靈禽まぬ意を論む左傳服虔注よ云
 ふ貌恭體仁はる時ハ則鳳の來儀ま何山まよ呼ま
 了黄帝の時鳳凰來儀よ阿閼よ巢組み少昊金天氏の世よ
 集り堯帝の時阿閼よ巢ま何漢昭帝の世よ一度

宣帝の世は六度出た其末代は鳳凰の來儀ハ其ノ聞ゆ
リ如此ノ世を隔了邂逅出た鳥あり小乾坤化生胎生や
尾胎孕は大模範有了屬族亂らぬハ常ノ規則の其中は聊
變形出來損一有るも此世の習ひあり然るは鳳の明時の
み來儀をまゝは鳥あり其見ハ其年月ハ何ぞも住了
何れから今聖代の報知得く演戲俳優慕閑き折聲聞て進
み出た如く來儀をまゝ鳥乎抱腹をくま迂遠あり成る程
前時出現の時ハ惡帝暴王の時で無き故靈鳥ノ名を付了
乎ハ知らね共聖の名前ハ付らせぬ漢昭殊は宣帝の其一
代は六度迄出た程ありバ聖帝明時の伏羲より神農堯禹
湯文武此聖代は何出たぬ鳳のぬらりと云べき故僕ハ愚

按て斷ぜんは鳳は決して靈鳥や瑞禽の名ハ下させま聖
王明時來儀を其確説も建了難く支那は出現せし時ハ
聖帝御代の時ハ夏桀殷紂周幽や暴秦の世は出た
ハ是れ偶然は鳳鳥の幸福とのみ思ふなり抑鳳ハ鳳系
の一種屬族有る事と必一定を冠するは僕ハ臆論吐ん
ハ山海經の説は其狀鶴の如き義を取考へ見る處
鶴の卵生發育は連れた偶然變體一五彩の羽翼美しき鳥
と變せし物を見了鶴の名を換へ鳳と名を付たる物と思
はる若し説文や山海の經は論まゝ如くは東方君子
の國は出た四海の外は果迄ハ翱翔したる且又丹穴山
は常不斷住む鳥ありバ取りまや珍奇づるを道理

く譬へバ雀鴉を見り如くよて靈瑞の名を下まをき價
 なり唯偶然と鶴の族變體一も珍奇鳥所謂支那の虛文
 から事仰山は形容の潤色加へ種々無量廣大らく説き
 たりと見ると奇怪も靈瑞も消えて迷ふの夢醒ん夫を乾
 坤の生々も偶爾不測の變化あり周の宣王癸卯ある三十
 年と馬に里と變化一人とあると何れも我朝よるも
 天武天皇十年は赤龜獻も記録何れも形氣の變ハ羽翼も
 添了白鳥や白鳥や白雉朱鳥や朱雀すて無きと確決も人
 ららむ其證據よハ人よても現世若年幼童の中ら白髮の
 人も有り亦赤髮の人も有り鶴の變體五彩ある道理知りた
 る事ありバ古來今來喋々の麟鳳龜龍四靈說因循雷同を

龜ハ古書よ上圓なるを天は法り下方なるを地は法り背
 の上盤るハ丘山は法り玄文交り錯り以て列宿をあら又
 一説は甲蟲三百六十より神龜之が長かりよ何れ所謂
 麟鳳龜と龍を四靈といふ了尊か鶴ハ千年龜ハ萬年の
 齡を保つと稱賛を祝壽賀建の詩歌よ多く龜の齡を讀み
 込ぬ事々稀も去りあるのら實理を以て論されバ新陳代
 謝の動物の活用絶えぬ有機體木ハ違ふも千年や萬壽
 を保つ道理あり世間ふ松ハ千年の齡保つと稱され木も
 千年ハ難しん況や動物新陳代謝も活用腸胃の體も樹も

龜

龜ハ古書よ上圓なるを天は法り下方なるを地は法り背
 の上盤るハ丘山は法り玄文交り錯り以て列宿をあら又
 一説は甲蟲三百六十より神龜之が長かりよ何れ所謂
 麟鳳龜と龍を四靈といふ了尊か鶴ハ千年龜ハ萬年の
 齡を保つと稱賛を祝壽賀建の詩歌よ多く龜の齡を讀み
 込ぬ事々稀も去りあるのら實理を以て論されバ新陳代
 謝の動物の活用絶えぬ有機體木ハ違ふも千年や萬壽
 を保つ道理あり世間ふ松ハ千年の齡保つと稱され木も
 千年ハ難しん況や動物新陳代謝も活用腸胃の體も樹も

雲霧飛鳥表敷多秋
園宵方猶多他倚
志存より明并化世
美切世山そ方維来



戸世の諺よ浦島う靈龜よ乘了海入り龍宮鬼よ到り了
ハ乙姫とやら契り來了玉手箱と賞し一と申傳へ了去
る歌よ

浦島が聞了海一き玉手箱明了嬉一き玉の初春
或ハ安部の童子九龜を助け奇特よ靈龜よ乘了海よ
入り龍宮城が鳥音を分つ玉得了歸り一あゝ無稽社撰を
吐散らま世よる愚物も多きあり能く事理を察まど
氣中生活まら人の水よ住居のなるべきや正法不測多
理多望或曰く夫せ足下靈龜の説を誘せ共世よ格外の大
龜ち里足下知らねど靈龜とハ大龜を指まの言あらん足
下妾よ小龜見た大龜の有る哉知らざる乎答了曰然らむ

今足下説る如く現在に徒大なる形見し神と靈とを
 附らるる象鯨以て神靈の名を稱せしむる世の中は功用
 るる神靈の名を付らるる益もなき麟鳳龜龍も付らるる
 牛羊犬馬猫雞も神靈の名を加へなん何れも功用も無き物
 神龜靈龜の名を許さず不稽の説と云はつる今神靈の
 其實を擧げ云ふんは西洋の名醫の術や諸工術ホトカラ
 ヒ蒸氣器械や合密術是等よりハ神靈も天工奇巧の
 名稱も付らざる賛歎を乞ふべき

灸

灸は火を以て療治するは法ゆゑ西洋より此灸療法を
 モグサと唱ふる其法を線香の火を能く搦き乾いたる

此書は梓陽ニ
 成ル後モガサ
 ナイト正説ヲ
 得タルモガサ
 ガサイトノ所
 ト云フ義ナル由
 因テ掲テ参考
 ニ備フト云フ

王政維新天下榮
 文明開化養人生
 止味安眠傷身灸
 當浴新鮮空氣清



艾は點し人の背或ハ手足等ハ貼し火を以て療むるの稱
也よー如此事ゆへモグサと唱ふる是れ西洋の語言よ
し上古今ハ灸治の法西洋より無きハ非し以て當時西
洋より此法を用る事ハ甚稀なり我國よりハ之を以て
艾と相令ししモクサの名も出たるは當時より多ク艾を
艾をモグサと唱へ來りし艾の方へ名を奪ひ取り普通
艾の概名の様よのみ思ふハ誤りなり抑此法支那より感
流行し支那醫の十四經絡の圖説に従て灸穴多數枚舉
を登るるを其方流傳し我朝ハ威行ハ當時に至る
ハ津々浦々或ハ野の末山の奥僻土遠地に至る程灸治

頑固信向し灸點されバ萬病ハ治まらう如く思ひ込み甚
しきに至るハ風土よ因て嬰兒をバ出産まらや早々早
まら半月手遅くも二三月間よ必す例よ背よ灸ま此因循
ガ蔓延し泣けハ夫を灸眼よ眇り込めハ夫を灸暑寒前是
も亦灸月々の二日の日よ是も灸西も東も灸もらけ迄
世の俳句
逃る行く隣も二日灸ら那
罪咎もなき無我無心健康な身を接し過ぎ子を可愛がる
思ひ仇負餘りし引倒し事共知らず何故よ灸まへるは
り理も知らず向ふも見えぬ無二無三滅多やあらし背を
焼了熱を苦しみ泣き叫ぶ秘藏の子をバ此世より阿鼻焦熱

肉痛一掃

六

の地よ置て七轉八倒號泣の子よも構はむ喜ぶ是が成佛
 様の氣取よあつて靦然と澄せし顔も暮せし馬鹿の
 至りとよふを歎物の道理を知らざりて唯出放願も
 慶置ハ昔話よ何の字書し此字ハ何と讀む讀む御覽と差出
 せむららハの字書し此字ハ何と讀む讀む御覽と差出
 親を我陽の我を張る是坊よ夫をハ柄杓と讀む字ト
 やグ餘り杓の柄長過るといへを童子を吹出し是親父
 さん滅法ふ是ハ申もといふ字トやと笑はるらら中
 字を書し見せせバ負ぬ氣も坊よ夫をハ扱き箱と云ふ字
 よ随分見事よハ出来やせど其棒がらつと太くかつ
 くのよ不便利ありといふを聞き童子ハ中よいふ字をバ

父上知し召させや或ハ聖門傳統の惟を精惟一不偏
 不倚天理當然人事の規則的の黒星きりくを外し
 ぬ意氣強く露急らぬ勉強の大志は弓を引絞り邪ハあき
 敬心の正直の矢を射る中其の中の字候と教らせたる
 至悪の父中らぬ譬喩の速うらぬ假令バ赤子物いふ是
 父母よ罪咎も無き我背をバ何の仔細を焼くを斯程
 焼けば身體よ何の功能何よ窮理有るの事と問せよバ
 柄杓の答へ扱き箱棒の扱き挿しよのるべし窮理利害
 知らざりて流行事ハさうし因循姑息雷同し子を苦
 しめ阿房者子より親よ文明の灸を貼し愚の眠り
 醒し開化の安樂へ導く事ハ肝要と夫を灸法ハ西洋よ有

る法ふせハ一概ハ排斥をばき事ぶよく灸の道理を能く
 知る目的付る用しふバ頗る功ハ有ぬ灸徒らよ可愛
 さる餘りる鼻負引倒く灸點をねハ一総よ萬病治る壯
 健よふると心得其上よ未ど慙不りる小きより大きくを
 死ハ能く利くと大灸點一罪もなき微弱の小兒幼童を半
 死半生苦くむる今其弊を矯むるあり抑灸の功能ハ大灸
 せよ其功ハ反る小よ有りぬ灸能くく乾く艾をバ小
 く捻りる火を點し徐々緩々よ腹力を起さしむる緊要
 灸火を貼し漸々よ温より熱よ及ふバ刺戟感ト堪え
 忍ぶ為よ腹張り息を溜め肺の氣胞必皆脹せ横隔膜を壓
 垂し身體総る努力まゝ灸火滅し溜息をホしと突きふ

ハ肺臟ハ萎縮し横隔又上り一上一下心藏を壓迫よ
 血液を流利循環健運よあらむる灸を點し努力を過さしめ或
 多しふ癒けせ夫故無理よ大灸を點し努力を過さしめ或
 ハ無心無我を居る子をハ驚愕させしめバ壯健所ハ驚疾
 を引出る咎ハ如何ぞや因る灸火の功用ハ精神爽快血液
 の循環進む強壯の治療と見せバ事足らん然る灸を點
 するよ極喫緊の要語あり艾ハ至極能く乾き捻るる至極
 柔うよフハリくと小粒よ捻りる大よまむるを必を堅
 くまむる唯火よ熨易く早く消る肝要よを
 左よ俗の諺よ称する如く牛糞よ火の付く如く付ま
 難く又消え難く有る時ハ唯徒らよ何迄も熱く腹を張

り勞を努力し神氣衰へん因了灸熨心得ハ晴天無風の日に
 を選り身體無熱の時を見り小粒顆より點を灸し必大よ
 しまべうのむ唯腹張り了彈力の起る候以了度とま灸し
 世の人多く誤り了灸治ハ大よ何らむんバ身を温むる不
 足し小きハ以了功ありと思ふ者何り左よありむ身を
 温むる主意ありハ顆粒の火よ了焼む共火燧焼火や風呂
 しまるも満身温めたらんぬを片落ぬあく温まり功能めき
 了見ゆを共反つて夫ハ悪しきあり故如何あねハ腹力を抗
 抵さるる功ハあく火を灸ハ火毒内陷し風呂より弛弱起
 るを灸し唯小顆より加減よく腹部よ力起さやう肺よ氣を
 溜め膨脹し横隔膜を垂下し了神氣清爽血液の活發循環

とも機轉自然の妙を輔佐ま灸し珠よ灸を點まるとも名手
 選ぶる肝要と抑諸事ハ覺悟し了居ると居らぬの相違よ
 了事を忍ぶの多少あり寢耳よ水う敷うらの棒よ出逢ハ
 狼狽ん身を火了焼くも覺悟し了居りぬを事よ堪えぬを
 一堪えぬを覺悟まきよ因る假令ハ俄然點灸の背脊上を
 墮落せば其人ハ大愕飛上り毛聳粟肌震慄し自段墮踏了膽
 冷ま是は何事と覺悟し了居るハ灸火の圓轉し背脊よ落
 事如き何ぞ驚く事何ん然るも覺悟まき時ハ瑣細な事
 一古様の驚きはさバ養生を求る趣意よ反對し及了病氣
 生るを俗よ所謂生兵法ハ大創の基毛を吹き疵を求め
 たる類あり故よ灸點の時ハ前條論了灸治規則よ照

準一次に炙點得と人の墮落をせぬ快手をバ撰と雇ふ
 了用ふる唯一唯去りたるのら文明の世に至るハ因循の炙治
 を以て徒らよ身を焼き肌膏を焦きよ寧新鮮空氣浴急
 らむ一と身體腐敗せぬやうに保護する是れ豫備法の第一
 とると思ふとる

鶴

鶴ハ願ふ大鳥も一と家頭脚共よ長く世稱して千年の齡
 を保つと云ふ風土は因る之を殺す者無き一は非を
 といへ共世人社が其壽ふ似ん事を祝望する餘鳥に比
 べれば獵夫なる之を殺さざる者十は八九は居り或ハ
 邊よ巢を細うハ福德吉慶ありと喜び九を賀延祝席必を鶴

事理研窮
 造化微因
 循廢慶發
 文華誰云
 鶴得千年
 壽當識衆
 禽同一機



る係
 (世)

御門は巢を懸るの句を歌ひ或ハ高年を祝するも龜
 齡鶴算多むといふ人喜ふハ笑ふべき甚しきハ非とも
 鶴よ〜此賞譽を受け古来よ皇天砲の難を免る〜ハ偶
 然の大幸といふを〜先其弊を辨せん〜龜の條下といふ
 如く動物族は千年の萬年あるの齡をバ得る處き道理更
 ふあり日夜生々長大〜新陳代謝の活物ハ植物よりハ速
 ふ腐敗に向ふ常理多き植物より千年を保つ長壽ハ稀
 あり〜同鳥より有りあるのら鷲鷹鳧雁ハ短命鶴のみ
 獨り長壽なる道理あるあり去りなると熱帯國ハ餘國と
 ハ違ひ生々迅速ハ經過ある由聞傳ふ又人倫を指さる
 足下禽あり獸ありといふも必不平せん然るを足下鶴の

壽に似る處き瑞と祝する其人勇々悦まん長壽を好む
 慈なり鳥に比する甘〜直〜指〜鶴ありといふ
 則一間のみ此瑞〜聖代の文明開化の恩澤は浴する
 うれハ奮發〜研窮琢磨精出〜古来聖賢の因循を一掃
 あり了鶴に似る事をバ深く耻づるき而已矣

鎮帯

鎮帯ハ妊娠五月必之を用るを我國の吉例あり其由來
 まら慶を考るよ人皇十四代
 哀天皇の后 神功皇后新羅を御征伐遊さる時偶然御懷
 妊は渡らせ玉子を檀日の浦に於て石を取ら腰に挟み因
 了祝し了曰凱旋し了茲に生ませ玉へと説く書あり或ハ俗

仲

全國日風結者濃
妊娠產交而進
莫來古者味切吉
勿取產前產後凶



學謝長庚法
百俸

ふ傳ふ弓弦を以て甲鎧の上より結んて祝し玉ふ共い
ふ其後軍勝利を得玉ふ新羅王降服し振旅し御凱陳筑
紫よ於て御降誕下り則

應

神天皇を皇後よ兵家の祖神と崇め奉り八幡太神宮と祝
ひ敬し奉る如此吉瑞を以て我國一平は妊婦必之を用
吉例となす者歎僕其實縁を知らむよへとも後世よ
至り妊婦の鎮帯盛し流行し事理も辨せむ縁故も問も
雷同し夫を妊婦といふや否五月よあるを待兼る一日逆
も千秋の心玉帯を引結ぶ或ハ傳へ誤りて鎮帯さるハ胎
内の兒子分外は肥大する時ハ分娩其節よ沮礙或ハ陰門
破裂を恐せ肥大せぬ様と一途よ認めなす力一杯無

理やもら締る胎兒を壓迫し妊婦血液循環を障礙するの
 大害を引出さるり産後にも上逆眩暈する時ハ虚實寒熱
 問ふも一物有る下部より上へ如く思ひ詰り譬
 へハ鞆の腰締るやうに思ふ又締る因り血液自ら凝泣
 ありし順利せよ上逆更甚し其理を知らず猶締る彌縛
 川子玄子之を憂ひ頗る苦心盡力し懇々然と鎮帯の胎兒
 不利の理を説き鎮帯廢去せむといへ共其古來より
 舊習の天下の通弊たる者を賀川先生一人より之を救ふ
 能はむ其門人片倉元周より迎ふ我國一般の傳染深き俗
 習を反對防護する事のあらぬを知りし人々の因循好み

に従ひ其禍の大あらぬ様を計り鎮帯を幅廣く帯一面
 も擴り緩く縛り胎兒をバ壓迫させず腹力に助けを得
 るに便りよま亦勤めたりといふ層一希くハ分娩の有る
 時迄ハ鎮帯を用ひる産後腹の冷或ハ諸臓垂下し腹力
 便りなき者ハ右にふ通り鎮帯の幅を廣め緩柔し腹を
 覆ふる寒冷を防ぎ腹力扶助しなハ則害ハ無うる層去
 せ共是は後來に其弊生し遂に又緊急を至る層一因
 了舊習因循の固く信し中よ過ぎ恰ら瓢の腰縛る如き
 禍あらんよ寧鎮帯する者の世ハ無きハ若き也

肉食

世ハ肉食を忌み了之を食まれば其身を穢し七日或ハ半

若くは半回丁は
 際迄は漢菜肉の
 雑言、野菜法、於
 其縁、吸収、能、素、精



月或ハ一月の間神詣であらぬ杯いふる之を恐る事蛇
 蝎の如く山野僻陬の地未と因循姑息の域を免せざる者
 多しといへ共肉食何と身體を穢するの理あらんや抑両間
 生活する人物禽獸魚蟲及植物類に至るまで各其職あら
 さるなり小ハ大の用は供ふる事必然の理あり人ハ則萬
 物の靈天地の密理を窮極し造化の秘機を發見す故に人
 をバ呼ぶ一箇の小天地ともいふをどう人物禽獸魚
 蟲及植物類を頭より唯一平に呼下る物とハいへと人身
 と禽獸類と其間隔つる事ハ何と唯百段千里のみあらん
 然らバ則萬物の靈を滋養し禽獸の類をバ供し資する事
 何を穢する理あらんや支那の書籍はゆる通り牛羊豕を

大牢と唱へて天地社稷をハ祭り或ハ人間の滋養ノ資
 最上と致し了次ノ鶏豚や狗彘の類を常食と致し風
 俗其國の風ニ從ヒ支那文字取リ扱ふ人倫を正し三綱
 五常をバ立リ其國聖經ヲ賢傳の書ニ因るもの斯く支
 那國を慕ハる此皇國ノ生々來々肉食忌むハ愚の至リ
 見や皇國古代ノ神ノ獸類供ふ例神武權衡録といふ
 牛肉糜肉ハ上古の神々の食物なり如何ニ末世をバト
 了神何ぞ穢せし玉ふをきや能く其本を考ふる事
 多ク云々又曰く牛を食ふ了穢せしむ一年ハ半年ハ神
 へ参る事ありぬ極らハ古の天子公卿牛を嘉肴と
 食し玉ふをきや穢せしむ事明らなり其外四足の類を

神ノ穢とせを和州南都の春日大明神の祭禮霜月二十五
 日より二十七日に到る此祭ノ狐狸兔貉の類を村々の役
 當之を殺し其數を定めて神ノ獻を信州諏訪大明神
 此祭ハ鹿の血首七十餘數揃へて神前ニ供ふ是ハ四足
 小穢せしむ物を何ゾ故ニ神前ニ供ふを穢せしむ無き
 事明白あり云々といふ是ハ其證あり且つ魚鳥を食し獸
 肉を食せぬ杯といふ事ハ道理聞えぬ事をハ獸肉ハ何
 故穢せ魚鳥肉何穢かといふ詮議せむ唯固く執り狹隘の
 井蛙の見よ出るのみ能く觀ト玉ふを此世の用を為
 事ハ禽獸隔てあるを以て一尾ノ行き羽翼よる翔翔
 とると四足よる走ると相違のみよる知カハ別ハ變り

唯牛馬ハ重きをハ負ふる速きも致し多し或ハ田を
ハ鋤くやうぬ實地の用を致せども夫れを牛を滋養物
第一とて用ふる況や熊や狐狸猪鹿の類ハ世の
中の贅物多しハ討取て世用は供へ滋養も資るハ至極
の道理あり何と汚穢の理はらんや知力ハなく禽鳥の
其用を多し一例ハ鷹の鳥取り鶏の時を告ぐり鶏の魚を
取らち獸は増りあんな然らむ體の小きのが鳥肉喰らひ獸
類ハ大なる故は喰らぬ者あるは齧る者あるは齧る
の好悪といふつゆ況や清く清うしぬ上論せむ植物
は野菜の類ハ人糞を吸収し汚穢物獸より以て不
浄ある者あるべきを舌鼓打て味ふ野菜根音一甘いと喜

ふハ亦不都合といひつゆ夫れは全獸の清浄さ人糞喰ふを
犬をのり其他ハ木の實草五穀生活の内清浄さ夫れ人糞
吸収し肥大なる全一物以て神も供へ身も食し潔白な
ると思へる前後不首尾と申を愈し僕も愚按を断せん
野菜根より獸肉ハ及て清浄皎潔を神に獸肉供ふると穢
せし忌むる人糞を頭あゆせよ致しつゝ其吸収の滲込
ふ成長したる野菜根及て不浄あるを乎神ハ非禮を受
ぬる心の上を申さるり獸肉喰ふ參詣を忌む糞汁肥
大なる野菜の類も忌むん柳社參る趣意ハ神に向ふ
了福德を求るやうぬ事さる一心不乱正直の道直き事
矢の如く私欲邪念を断ち拂ふ純一無雜一筋の心を以て

曇りなき神の鏡を照覽し預る為に參詣をせり氣を
 ハ獸肉を日々月々々々食せし何の穢きも何の恐を萬
 一つも有るなきや假令美服を素食し參詣を共種々無
 量心よ邪念強欲の有る非道の願せを身體汚穢充滿し神
 よ納受の有るなきや因る汚穢の有るなきハ獸肉食よ非
 ぞ私欲邪念よ歸するのみ唯須く他よ求るを待たむ
 人々固有天性の純良心よ立復り切磋琢磨の功を積み誠
 意正心修身し文明開化の恩徳を報ひん事を乞ふと云

結疑

當時文明開化の世虚假を廢し實地を擧げ天下の人を
 る各其天性に歸せしめ玉ふ真し欽仰すべき事ありと云

欽仰維新平
 政天
 文明如日昇
 光鮮
 因循姑息翻
 然去
 斬疑當就開
 化先



抑天の毛髮を生む事ハ偶然の浮塵なる事ヲ更ニ身
 體貴要の部分を保護セシむる爲ニ頭髮の腦府
 於眉睫の眼界に於鬚鬚の口門に於陰毛陰具
 於如きは是等中ニ就テ頭腦ハ則精神の府一身萬機
 を統裁し思慮才覚の起る所其他痛痒寒熱寤寐動靜五氣
 の感觸七情の發見悉く腦府ニ統理セざる事ハ故ニ天
 皇珠多ク毛髮を生トシ寒氣を防キ毀傷を護リ人々を
 其精神を養ヒ其思慮を安ゼシむ然ラハ則此毛髮
 剃リ落シ者ハ天意ニ背ク事ニ似テ佛門の徒悉く髮を
 剃リ如きは固ヨリ人倫を絶ツ宗旨論を足らざる皇國
 上古ハ剃刀を用事ナク聞ク是レ天理自然

淳風といふ中世に到リ半髮の俗と爲る者ハ傳へ聞
 く去リ一將を其名反を謀リ戦争の時敵味方互ニ相紛亂
 以テ同士討せん事を慮リ前面半髮を剃リ落シ記
 認セシむ因テ此頭を朝敵頭ト唱フ事聞ク何ぞ致セ此
 半髮を剃リ落シ亦天意ニ戻ル事ニ似テ當時文明の
 道盛ニ行ケル都下ニ斬髮燦然トシ不開化の者多ク
 いへ共政府漸ク遠ク鄙野僻郷俗ニ所謂野の末山の奥
 津々浦々ニ至リ未ダ天の生理ニ貫徹セズ半髮結髮の
 者頗多ク然リといへ共文明遍ク全國ニ及び遂ニ開化
 致スル確乎相違ハ無キ共項日髮を惜みテ切リ無
 姑息人僕ニ結髮斬髮の得失尋ぬ人ありト因テ聊

贅言を吐く情實述ぶ其も嗚呼普天下ハ廣大ノ人情も亦
異ふ世ハ僻地頑村此人の如き姑息の多うらん僕も贅言
萬一も取る處なきは幸甚と愚説を吐露を所以あり

附

勸學以呂波歌

勇め唯類も稀なる大君の殊よ新なる御代の學いよ
論語よみ論語知らむ成らぬやう文よ心を深く留めよ
始めおぼろろ終りハ稀なるを唯ひとせよ物學も
俄なるなる學びの進み口休まぬやう勤め勵めよ
譽らざる名をハ雲井よ揚より親の御名を四方よ高く
經巡りて善き師善き友求む水の器よ副たるなりと

虎と見る石よ立つ矢のなめしけり念ふ心の透らざるは
知慧開く明らけき世は相老の松としりき根配りをせよ
理を窮め學の道は富む人ハ勤めたるゆみなき故とせ
脱きまざる舊き習ふと垢つき儘よくのちを衣
類同し善くぬ友を慎め朱よ漆を身も赤くある
惜りまは過る月日老矢の如く入るくも學べ人
忘せざると思ひ出さざる譬何を寝る起る學へ
神國の猶も尊く明らけき文の學いよ進めをさる子
善し悪しハ皆身より我と我が心を照せ道を
寶も光るあはれの鏡もくもぬやう研ぎ人
禮を知り義を立るは人として上を敬ふ道よ

しみ易く移りやまはる人ありは已に克て禮を復せよ
 月と日を學ぶの道の的をば天の下に知慧の照り
 寝る思ひ起て誠を學ぶ事何妨るもいひへの人
 何事も學の道なる數は人の一と度我を千度せよ
 埒明ぬ人と呼ぶも口惜さ耻る勤めを問ひ學ぶ道
 むつくりと玉のやうなる心より筋目の通る光あり
 埋む木よあつても悪はゆる故を空より清き有明の月
 井の中は蛙と人と呼ぶもハ學ぶの道よりき故あり
 飲み食の奢りハ徒に眼の前を善き名を流す問ひ學ぶ
 大君の深き意の海の恩は滴るも報いへん
 苦しめを苦しむ程は天地の恵は更ら明らけり

矢は如く直き誠のしと筋は學ぶと透らさるべき
 丈夫と人と呼ぶも代りハ何なるも物學ぶ道
 聞けし支那と大和の今昔文も人の高き功績を
 文しけ道明らけき君代は懐手し如何くらさん
 心より身の賤きを恥るも一學は如何下置
 選るも友ハ善きけし限るも麻の中なる蓬見知り
 手舞は足踏も覺るぬ明らけき文は學ぶの深き恵
 明らけき御代を戴く身よりハ學ぶの道を勤めさるめ
 櫻見よ咲けハ波りと人の寄る薫りようをれ道の學ぶ
 君代の光り届るぬ隈も津と浦も榮ゆ學ぶ場
 許さるも心の駒の繫き所唯ららぬの手綱

惠^ヒあ^らう^く文^{フミ}明^ミら^けき^御代^ヨの^恩人^トの^人たる^道の^を人^を
研^ヒき^まる^バ研^ヒき^一程^ハの^光り^ある^學の^道も^玉は^工も
知^レら^ぬ事^{コト}知^ラぬ^とい^ふ知^レる^なり^如何^{カニ}あ^らは^し問^ヒ學^ヒ
繪^エの^事ハ^素き^まる^皆后^ハも^唯誠^ヲを^真先^トと^せま^す
日^ヒは^新く^月も^盛り^は物^{モノ}學^{マナ}び^世も^尊き^心も^あら^はす^べ
諸^{モト}共^ニ問^ヒ學^ヒし^て研^ヒく^を砥^ト石^ノ無^クハ^如何^{カニ}光^ルん
責^セま^らる^師を^バけ^りと^恨む^も道^ノ傳^ハる^を慈^シま^らる^も
進^スみ^行く^我ノ^日の本^ハ文^ノ道^ハ皆^人毎^日と^いふ^もあ^らは^しる^も

因循一掃終

明治九年六月十六日出版類
明治十年二月出版發兌



著述者

增山守正

京都府士族

上京第北區上大坂町北三番路次止宿

京都府下平民

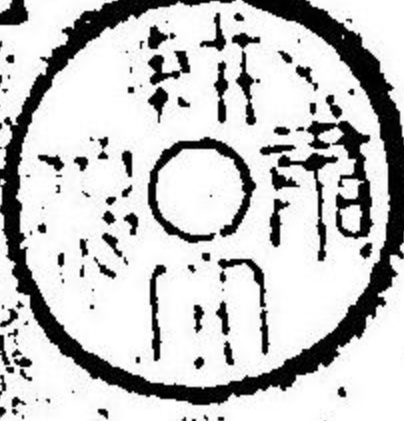
福井源次郎



下京第六區三條通寺町東江入氣拾番地

京都府下平民

福井孝太郎



京都 出版人
開版
書屋 出版人

上京第三區寺町通條上六百八拾四番地

